

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十一年六月一日発行(毎月一回一日発行)
第十六卷第二号(通巻第一八二号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第182号

6. 2009

父

品川 鈴子

児ら昼寝母は八面六臂にて

太つちよの父をカウチに児のひるね

忌の父に溜息籠める緋の牡丹

孤槽にて目高おろおろ反転す



餌にたかる孕み目高のすばしこく
灯さずに孕み目高の尾振り観る
走り梅雨忘れ傘賜^たぶ支配人
混むバスに上着の襟を這ふ毛虫
らつきようを漬けるも喜寿の目分量
足音もせず夫戻るらつきよう漬け



玉

鈴

吟

東京 北川とも子

小さき鳥椿に埋もれ啄めり
低空に鴉の群れて春めけり
まづ母に香り供へて桜餅
かたすみに採り残されて春大根
春の夜の静寂に深む雨の音

東京 北島 明子

フアクスの紙買ひに出て草餅も
立春の茶柱倒さぬやう啜る
遠目にも雪の深さや窓の富士
梅見山床几でそばでも食べて行こ
風光る音のしさうな長睫毛

兵庫 木原 今女

罌を刺す捕手の防具に風光る
新調の眼鏡が光る花辛夷
木蓮の蕾膨らむゴルフ径
稿終えて有明の月朧なり
声張りてないしよ話を花菜漬

兵庫 木村 美猫

春荒れに動ぜず天文科学館
春疾風ヒーローショーへ駆けゆけり
菜の花が聴衆川瀬の交響曲
パーマ屋の窓に貼るピラ黄砂降る
雛の間に明治のランプ灯しをり

愛媛 久保田由布

空つぽのところで雛が流れゆく
流出を逸れし雛のほつれ髪
妹の居らぬ部屋より桜見る
もの言はぬ妹と居て日が永し
もう要らぬ吸吞に挿す花莖

兵庫 藏本博美

アスファルト裂け目抜け出づ冬莖
野草より活花に向く菜の花は
影の上に影を重ねて黄連翅
山肌の青つきぬけて辛夷咲く
焦点を合はせ兼ねをり梅の心

兵庫 栗田武三

ゲーム機は封印したり大試験
とりあへず野に出て遊べ合格子
合格の子の深眠り春霖雨
暫くは脇抜けのごとし入学子
入学子来たり説教控へたり

兵庫 小阪律子

水仙へ俯き並ぶ石仏
片足で權を操り米螺採る
篝火の浜へ寄居虫一斉に
呉須鉢に沢煮の独活と飯蛸と
厨子の岩割れ目に匂う山すみれ

東京 後藤とみ子

啓蟄やセール会場長き列
薄型といえどテレビに春埃
春の雪何か明るき心地なる
ペンギンのように固まり修二会待つ
せんべいと角なき鹿にねだらるる

大阪 小林 玲子

メダリスト巴投げ観せ寒稽古
寒卵量り売りする土曜日
宿貸して辛業証書の忘れ物
湯たんぽの蹴り出してあり朝寝坊
冬籠る竜血走しれる天井画

香川 近藤 倫子

卒業歌伴奏の子は見えぬまま
定位置はゆづらぬつもりふきのたう
軟膏を塗つて貰へり恋の猫
ふらここや母校の名前探す癖
木の芽雨調律終へしピアノ鳴る

兵庫 坂口 三保子

流水の波うねりつつ接岸す
流水の接岸喜ぶ漁師居て
庭隅に香の籠りゐる冬董
クロツカスのポイントとなる濃紫
岩海苔を採る新らしき草履履き

兵庫 佐方 敏明

戻り寒おやじあふるる立飲み屋
空家めく門より出づる春シヨール
春めきて浜に腹ばふ児が一人
朧夜の港を歩く四ほんもど漢
凜と立ち斃れしインコ芽木の雨

東京 佐山 昭子

田中食堂うどん食べ放題遍路かな
御詠歌に鶯のこゑ加はり来
緋寒桜六番札所安楽寺
舎心が嶽新緑のなか大師像
街道の車庫にも雛の御接待

薬草歳時記

(一八二) テイカカズラ (定家葛)

菅原由紀

日蔭より定家かづらは咲き上る

後藤比奈夫

植物にはさまざまな名前のつけられかたがあるようだ。形からつけられたもの、遠く外国から入ってきた名前がそのまま呼ばれているもの、人の名前や歴史にちなんだものなど……

テイカカズラと聞いてすぐ思ったことは、藤原定家のこと。確かに定家葛と言う。謡曲「定家」に因んでつけられている。久しぶりに観世流謡曲百番集を取り出して「定家」を読んだ。

藤原定家と式子内親王の忍ぶ恋の物語り。不思議な石塔を見いだしてみれば、葛や葛が這いまとい石塔の姿も形も見えない程。これは式子内親王の御墓で、この葛を定家葛と言う。定家と内親王は忍びの契あさからず内親王が亡くなったあとも、定家の執心が葛となって墓にまとい、互いの苦しみが離れることは無かったとか——悲しいような恐いような植物の物語り。

カズラは髪飾りの鬘のことで、長命のまじないとも言われている。

テイカカズラは本州、四国、九州、朝鮮半島に分布し、山野の林内に生える常緑のつる性の木である。茎は長くて他のものに這いのぼり、長さは十メートル位、直径四センチ位になる。葉は対生、有柄で長楕円形。光沢があり革質で全縁鋭尖頭。

五月から六月にかけて花が咲く。花は円錐形集散花序で、白色から黄色に変わる。芳香性がある。

薬用部は茎葉。絡石藤（ラクセキトウ）七月から八月に採集し、粗くきざんで日干しする。成分はトラチエロシド、アルクチイン、ノルトラチエロシド等を含む。

薬効薬理としては、トラチエロシドには弱い強心作用があり少量で呼吸、血圧、心運動の改善が認められる。他に鎮痛解熱作用がある。

煎じて利用するが毒性も強く危険が多い。処方例に絡石湯、絡石湯酒、靈宝散など。

絡石藤の正品はタイワンテイカカズラである。

参考文献 『原色牧野和漢薬草大図鑑』三橋博監修北隆館

著者略歴神戸薬科大学卒

テイカカズラ(マサキカズラ) [テイカカズラ属] (きょうちくとう科)

Trachelospermum asiaticum (Sieb.et Zucc) Nakai

定家葛

薬用部分：茎葉



須賀悦子画

墓山に定家葛の花香る	鋸山へ定家葛の上りゆく	定家かづら山家少しく動きけり	岩に散り定家蔓の印結ぶ	虚空より定家葛の花かをる	尼寺の定家葛の夜なりけり	夕暮は定家かづらのかたへにて	離々離々と定家葛の花もつれ	隙間なく闇くる定家かづらかな	月さして定家かづらの花匂ふ
*塩出 眞一	*佐田 昭子	永方 裕子	西村 和子	長谷川 權	大石 悦子	青柳志解樹	矢島 渚男	鷺谷七奈子	福田申子雄

(* ぐろつけ)

鈴の奏

品川鈴子選

蠢れる始業のチャイム樹間越え 兵庫 櫻木 道代

強気にて骨董買へり牡丹の芽
春一番にはか仕込みのヨガポーズ

若者の短縮ことば万愚節

教材の凧上がらずにベルの鳴る

愛媛 羽生きよみ

芽吹く芽の左前有り右前も

節くれし手には似合はぬ雛抱き

沈丁の香りに沿へば勝手口

山笑ふ媼意のまま物を言ひ 兵庫 中井 光子

後輩に見守り託し卒業す

しやぼん玉富士に届けと風に乗せ

春風と共に飛び箱五段とび

誰よりも担任が泣き卒業日 香川 横内かよこ

先生の慣れぬ式服卒業日

鳥の恋追へば逃げゆく影法師

初めてのスーツ仕立てて風光る

のどかさに一つ崩れし目玉焼き 兵庫 上田 幸夫

春着着て笑みを絶さず納税課

生真面目な父には似ざる花と酒

飯事のやうな暮しに土筆摘む

春雨の辻托鉢の声は逸れ 兵庫 井上加世子

群れ集ふ乙女椿の堅蕾

違う道と疑うほどに辛夷咲く

外壁に蜂おり子等を呼び戻す

女びなのみ独り御座おはして資料館 大阪 吉田 光子

補陀落へ綱切島に春の潮

那智の浦補陀落の方鳥曇り

渡海舟しまわれてあり寺は春

釣釜に鎖三目のゆらぎあり 兵庫 前田 玲子

春日落つ円月島の穴それで

草萌をしつかとつかむ小さき足

かじられし枝にも確と牡丹の芽

雛祭酔の香磯の香夕厨 愛媛 三浦ひろみ

菱餅に幼残せし指の痕

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 蓮尾 みどり 〃

*選句は全て 品川鈴子

強気にて骨董買へり牡丹の芽

櫻木 道代

飛びつくような古美術と出合った時には一見の勘を信じて、手馴れた駆け引きや値踏みなども、骨董趣味の楽しみのひとつ。掘出し物は先々驚く程の値打ちとなる。少しでも迷う折には、すぐ決めず冷静に二見・三見すれば、本物は見る度に好くなるのか。牡丹の芽は果してどんな華を開くのだろうか？

教材の凧上がらずにベルの鳴る

羽生きよみ

昔は大人と子供が一緒に凧を作り、バランスや糸の位置や長さを微妙に手加減して、風向きを読みながら天へ上げた凧だった。

学問に重きを置く現代は、授業で理屈を習っても、凧に命を吹込むのは難しく、体で憶えた勘が要る。教師も多分未経験なのだろう。

春風と共に飛び箱五段とび

中井 光子

体育の得意な人は、五段重ねの跳び箱を、リズムよく軽々飛び越える。悠然と着地する長身は春風に乘るようで蝶かとも思われる。

文弱な私は背丈がクラスで一番低く、跳び箱が最も苦手、春風のような級友を尊敬していました。

誰よりも担任が泣き卒業日

横内かよこ

限りなく想像がふくらむ。先ずこの担任は男性か女性か、卒業生は児童か生徒か。一連の作品から浮かぶ人物像は、熱血体育会系の若い男性教師や、はじめて受け持った子供達を送り出す袴の女性教師。お好きに解釈をと読み手にゲタを預けられたようであらう楽しんでいただいた。

飯事のやうな暮しに土筆摘む

上田 幸夫

飯事に土筆摘みは付きすぎでは、と思わせて実は奥の深い重みのある一句。新婚生活に始まり子育ての時代もどうに過ぎ、今また二人だけの落ち着いた暮らしにもどった。年輪を重ねた夫婦が土筆摘みに興ずる、至福のひとつとき。

違う道と疑うほどに辛夷咲く

井上加世子

通りかかれば街路樹の辛夷が満開。花に目を奪われ香に圧倒されて、まるで別世界を歩いているような錯覚さえ。たしかつい先だって通った日は、まだ蒼も立ち上がっていなかったのに。素朴な言葉つかいで、おどろきと華やぎを上手く表現された。

那智の浦補陀落の方鳥曇り

吉田 光子

補陀落は南海上にあると云う観音様の住まう山。日本では和歌山県那智山を指し、青岸渡寺は西国三十三ヶ所の第一番札所。霊場巡りはここから始まるのだが、那智勝浦は有名な温泉地で、観光も兼ねた巡礼が引きもきらない。宿からはるかに拝む補陀落浄土は、この時期特有の薄曇。

草萌をしつかつかむ小さき足

前田 玲子

うらかな昼下り、庭ではようやく立つちの出来た嬰兒を、大人達がはやし立てる。ころんでは立ち上がって踏ん張る頼もしき。児は萌ゆる若草とともに、しつかりと大地をもつかみとった。ふつくら柔らかい小さな足を、交々両手につつんで愛おしむ幸せな家族。

干鰈風吹くままに身を反らす

三浦ひろみ

屋内で人工的に乾し上げた干物は、それなりに衛生的で否やを唱えるつもりはない。が小さな漁村にはためく？天日干しの味にはかなうものではない。干されてすぐは骨が透き通って見えたが、少しづつ鰈は干鰈へと変身してゆく。「身を反らす」に写生の行きとどいた佳句。

雛飾ることも略して草の庵

林 美智

とりたてて桃の節句を祝うこともなくなり、床の間に雛段を組むのも、なかなか骨の折れること。昔は娘の為、孫の為と労をいとわなかったが、いま自分の為に飾るのは内裏雛のみ。「草の庵」がひっそりと一句を引き立てた。